

山首上人さまご講演

ほとけ
仏の子

ぼさつぎょう
菩薩行の
かんじん
肝心



ブラシの木

仏の子としてほとけの働きはたらをしまししょう

仏の子ほとけ

我々われわれは仏の子ほとけです。

人を助けひと たす、救いすく、人に幸福ひと こうふくを与えること
は、自分の一番大事じぶん ばんだいじな仕事しごとなのです。

善い行よ おこないができるようになったことを
ありがたいと思おもって、実行じつこうせねばならない
のであります。

一つ間違まちがえば人に助けひと たすられなければなら
ない立場たちばになるかも知れしない私わがが、今いま、人
を救すくい、助たすけることができる身分みぶんは、本ほん当とう
にあります。

御開山上人御法話資料Ⅱ

我々われわれは仏の子ほとけですぐと、大変たいへんなことを言
われていますが、勝手かってにそう言いわれている
のではありません。法華經ほけきょうにはつきり説とか
れていることでもあります。

譬喩品第三ひゆほんだいに次のようつぎにあります。

『三界さんがいは安やすきことなし 猶なお火宅かたくの如ごとし』

三界さんがいとは欲界よくがい、色界しきがい、無色界むしきがいを言いいます
が、簡単かんたんに言いうと、この世界せかいのことであり
ます。

この世界せかいはいろいろなことがあつて、残ざん
念ねんなことに、今日きょうは何なにも心配しんぱいすることがな

いぐと、安心あんしんしておられることがありません。次つぎから次つぎに困こまったこと、苦くるしいことが

起きてきます。それを『火宅かたくの如ごとし』つまり、火事かじで燃もえている家いえのようだ、というのです。しかもその火ひは、こちらが消きえて

もあちらがまた燃もえ始めるということで、消きえる間まがありません。私共わたくどもの人生じんせいも同じように、困こまったことが連続れんぞくして起お起きてきます。

『衆苦しゆく充滿じゆふまんして 甚はなはだ怖畏ふいすべし 常つねに生しやう・老らう・病びやう・死しの憂患うげんあり』

衆苦しゆくの衆しゆは、もろもろぐ、ということですから、苦くるとは、単たんなる、苦くるしいぐ、というだ

けでなく、思おもうようにならないぐ、という意味いみでもありません。

实际じつざいこの人生じんせいは、思おもうようにならないことばかりです。次つぎから次つぎに苦くるしいことの続つづく、怖こわい世よの中なかです。

苦くるしいことぐは、人ひとによつてそれぞれ違ちがいがあると思おもいますが「生しやう・老らう・病びやう・死し」の四苦しよくは、誰だれにも共通きやうつうしてあるものです。

生うまれてくる時とき、お母かあさんは大変たいへん苦くるしい思おもいをされますが、それを「生しやう苦く」というのではありません。生うまれてきたことに起き因いんする悩なやみです。容貌ようぼうとか能力のうりぞく、性格せいかくとい

「生まれもつてきた」というしかありません。生まれてから成長するに従って修得してゆくことありますが、教育界の方では「タブララサ」ということが言われています。人生は初めはみな、白い板のようなものの上で自分で色を塗り、いろいろなものを作つてゆくのです。が、しかし、生まれた時完全に真っ白という事はないように思います。人間には、お父さん、お母さん、そして先祖から受け継いだ因縁というものがあります。その因縁をからめ、制約を受けながら人間は生きてゆくのです。それが生苦であります。

そして次に人間は、時間という因縁を重ね、年老いてゆきます。人生半ばまでは成長するということなのですが、成長しすぎると古くなってゆくばかりで、不自由なことが多くなります。

病氣もその一つです。人間生きている間必ず、一度や二度は病氣をします。病氣になると何がいけないかという、体ももちろん苦しいけれど、心が悪くなってくるのです。

最後は死です。死については苦しい思い出があります。最近は何万人もいるという長寿の時代になりましたが、今か

ら三、四十年前は、八十歳代という和本当に長命と言われていました。その頃のことです。仏教関係の貴重な古書を揃えるのに大変お世話になった方が八十五歳で亡くなられました。そのお通夜の席で奥様に「大変ご長命でけっこうでしたね」と申し上げたら、「いえ、主人の命はいくつまであっても足りないものでございます」と言われてしまいました。思わず「まずいことを言ってしまった」と反省し、お詫びしたことです。が、長命などということは勝手に他人が言うだけのことで、ご夫婦とかお身内の方にとつては、いくつであつても「もつと

もつと生きていてほしい」と願うものだと思います。軽はずみな慰めは人を傷つけるというのを改めて知りましたが、しかし人間は、いつまでも生き続けることはできません。必ず死ぬ時はやってきます。

『是の如き等の火 熾然として息まず』
 生きている以上、悩み・苦しみというもの、
 のは、これでもう終わりということはない、
 ということです。

しかし仏さまは違います。
 『如来は已に 三界の火宅を離れて 寂然として閑居し 林野に安処せり』
 仏さまは悟りを開いてみえますから、そ

ういう悩みから一切超越しておられます。

その後、肝心なことが説かれます。

『今此の三界は 皆是れ我が有なり 其の

中の衆生は 悉く是れ吾が子なり』

自分の今いる国、あるいは場所によつて、

いい所とか悪い所というように好き嫌いを

思うことがあります、この世界がすべて

仏さまの世界であるなら、いいとか悪いと

いうことはありません。ある方が、アフリ

カのある国に転勤命令が出たということ

相談に來られました。少し悩んでみえまし

たが、どこであろうと仏さまの世界と思

つてゆけば心配ありませんよ」とお話しし

たら、決心して行かれました。そう思つて

ゆくことが、仏さまの教えを信仰する者に

とつてはいいことだと思ひます。

その上さらに、大変なことを言われてい

ます。この世界に住む人は皆、仏の子

と言われるのです。私共は誰もが、仏さま

と親子の関係にあるのです。こんなありが

たいお言葉は、他のどの書物を見てもあり

ません。私なんかもうどうでもいい」と

か私なんかいてもいなくても同じだ」と

言う人が時々います、そんなことを言っ

ていたら、親である仏さまに申しわけのな

いことになります。私は仏さまの子ども

なのだぐと、胸を張って堂々と生きてゆけばいいのです。

さらに追い打ちをかけるように、すごいことを言われています。

『而も今此の処は 諸の患難多し 唯我一人のみ 能く救護を為す』

お釈迦さまはお生まれになられた時、東西南北に七歩歩まれて「天上天下 唯我独尊」とおっしゃいました。平たく言えば、

この世界で私が一番偉いと言われたのです。

世の中に、オレは偉いと言っている人はいるでしょうが、ただ偉いと言うだけではあまり偉くありません。その時におつし

やったことがすごいから、お釈迦さまは本当に偉いと言えるのです。

「三界皆苦 我当度之」つまり、この世界は次から次に苦しいことが起こる。誰もが

生・老・病・死の悩みから逃れられずにいるが、私がそれを全部取ってあげようとおつしやるのです。

これ以上ありがたいことはないと思いません。なのに人間は、この言葉を本心にから受け止め、実行しようとしないうと言われます。

『教詔すと雖も 而も信受せず 諸の欲染に於て 貪著深きが故に』

修養のお話を聞いても、今忙しいから、

とか、それはまあ、後で、ということ、なかなか本気で信仰しようとしません。せっかく仏さまが、すべての悩みから救ってあげよう、とおっしゃるのです。救って頂けるようなことをしてゆかなければいけません。それは、御前様の次のお言葉に集約されます。

『人を助け、救い、人に幸福を与えることは自分の一番大事な仕事なのです』

仏の子、と言われ、ありがとうございます、と喜んでいただけはいけません。仏の子は、何を、どうするのか、と考えてゆくことが

大事です。仏の子として大事なことは、悩み・苦しむ人を救い、助けることです。それが仏の仕業であります。それを別の言葉で言うと、四誓願の「衆生無辺誓願度」であります。

地球上には今、七十億の人がいると言われて、います。そのすべてを私は救います、という誓いがあります。

四誓願はいつもお参りの時お唱えしますが、正直言つて若い頃これを見て、こんなことできる筈がないじゃないか。そんなできもしないことを仏さま相手に誓願しているのか、と思いました。たしかに、自分一

人の力で世界中の人を救うことはできません。けれども、自分の一番身近にいる人を喜ばせることならできます。それが衆生無辺誓願度の始まりです。何でも始まりが肝心ですから、そのようにお考え頂きたいと思えます。

そうは言われてもはつきり言つて、一人を助けるのもいいけれど、その前にまず自分を助けてほしいと、多くの人が思っていると思えます。思うようにならないことがいっぱいありますから、そう思うのも無理はないかも知れませんが、仏教は、自分が幸せになるよりも、他の人を救いまし

よう。その功德によつて自分も一緒に幸せになりましたよ」という教えです。

『善い行ないができるようになったことをありがたいと思つて、実行せねばならないのであります』

これが菩薩行の一番肝心なことであります。人を喜ばせること自体が、ありがたいことなのです。こういうことをしたらこういう功德がもらえる。ご利益が頂けるといふのでなく、自分が善い行ないができるようになったことがありがたいと思うこと、それが法華経信仰の肝心であり、仏の子としての働きであります。